

第8回 研修報告

2024年11月18日（月）～19日（火）

災害と地域 能登研修

2024年の幕開けは、能登地震で始まりました。約1年後の状況と、高岡市の伝統的建造物群「金屋町」を研修しました。参加者7名。



被災地・仮設住宅視察

1月1日16時10分に石川県能登地方の深さ約15kmでマグニチュード(M)7.6の地震が発生しました。この地震により、石川県輪島市や志賀町(しかまち)で最大震度7を観測したほか、能登地方の広い範囲で震度6強や6弱の揺れを観測し、一帯が被災しました。M7.6の地震の前後にも規模の大きな地震が発生し、強い揺れが長く続きました。石川県では長周期地震動階級4を観測しました。

今回の研修は視察に軸足を置き、何が起きたのかを実際に見ておきたいと思います。そうすることで、何をすべきか、どう備えるかを自分事として捉えることができます。

現地の交通事情は未だ応急処置の段階で、快適さは望めませんが得るものは多いと思われます。

テーマは「災害と地域」です。

伝統的建造物群 高岡市金屋町

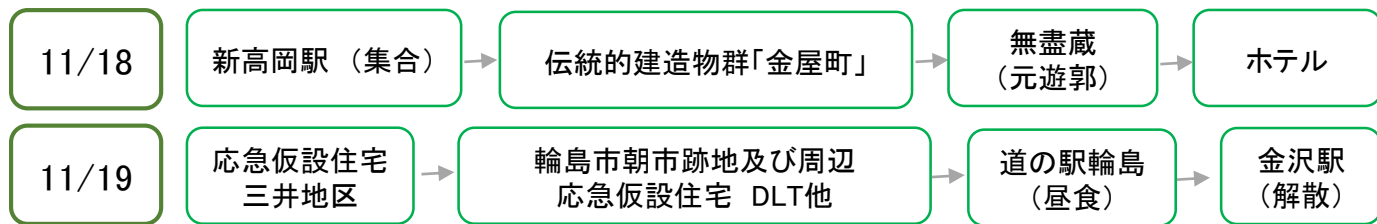
1609年、加賀藩の藩主、前田利長が開町まもない城下町高岡の繁栄策として、領内から7名の鋳物師を金屋町に呼び寄せ、鋳物場を開設。この地に鋳物産業が根付き、高岡鋳物発祥の地となり、高岡銅器産業の中心として大いに栄えました。

今も細やかな千本格子造りの家々が軒を連ね、およそ500mにわたって続く石畳の道と見事に調和して、美しいたたずまいを見せています。



一般社団法人

木と住まい研究協会



伝統的建造物群「金屋町」

400年も昔に鋳物師（いもじ）を招いて発展した鋳物の街。素晴らしい建築物群です。最近では、世界遺産、薬師寺東塔の大修理で交換の必要があった2枚の「水煙」（塔の最上部に取付られる大型の飾り金物）を、伝統工芸高岡銅器振興協同組合が1300年前の姿に再現させました。その超絶技巧は、現存する建築物群でも感じる事ができます。



輪島市朝市跡地

コロナの後でも、年間15万人が訪れた日本三大朝市のひとつ、輪島の朝市。地震後に発生した火事により、朝市通りを中心に240件が焼失しました。現在では全て撤去され、広大な土地が広がります。

消火栓は断水、防火水槽は倒壊した建物に阻まれ、川の水は隆起により流れが遠くなり、ホースが届かなかったそうです。

密集した建物は通路が狭く、消火をより困難にしました。



地震で倒壊した建物と残った建物

朝市付近でも、残った建物が多く存在します。特に新しい建物は、無傷であり、不便ながらも生活が継続しています。

また、古い建物であっても明暗を分けた例が散見されます。道路側開口部が小さいもの、メンテナンスされたと思われるものは無事。「木造」という構造に原因がある訳ではない証拠となります。



倒壊したビルの現状

マスコミの報道で有名になった7階建てビルの倒壊現場では、周囲にフェンスが立てられ、解体作業が行われていました。

片側の地下杭が破断したために、倒壊したと言われています。今でも献花や供物が絶えず、犠牲者に手向けられています。



DLT躯体の仮設住宅

応急仮設住宅の3タイプのうち、被災者が退去後に輪島市営賃貸住宅として利用される「まちづくり型応急仮設住宅」の例。

通常的基础工事が行われ、躯体は「木ダボ」でCLTを固定したユニークなもの。短工期と躯体のリユースが期待されます。坂茂設計事務所による新しい取り組み。